

保母養成課程における総合表現の研究

～総合表現授業の実践から～

荒木 恵美子 岡崎 順子
関崎 哲 柴田 奈美

1. 研究の背景と目的

幼児を取り巻く環境の変化に対応するために、保育所保育指針は、平成2年に25年ぶりに改訂された。これは、前回昭和40年に制定された「保育所保育指針」について次のような視点から見直しが行われたものである。(1)児童・家庭を取り巻く環境の変化 (2)乳児保育等保育需要の多様化 (3)学問的研究・保育実践の進歩 (4)幼稚園教育要領との関連等(厚生省児童家庭局長通知による)。その結果、保育所における保育の基本的理念として、「保育所における保育の基本は、家庭や地域社会と連携を密にして、家庭養育の補完を行い、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができるような環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図るところにある。そのために、養護と教育が一体となって、豊かな人間性を持った子どもを育成するところに保育所における保育の特性がある。」(保育所保育指針 第一章総則冒頭部より)という記述とともに、以下いくつかの内容改訂が行われた。特に保育内容の構成の基本指針(ねらい及び内容〔領域〕)に関しては、表1・2に示すような顕著な変更が見られ、なかでも表現系の領域区分は、旧保育所保育指針において、それぞれ単独で別の領域として扱われていた音

表1

年齢区分	領域
1歳3か月未満	生活・遊び
1歳3か月から2歳まで	
2歳	健康・社会・遊び
3歳	健康・社会・言語・遊び
4歳	健康・社会・言語・自然・音楽・造形
5歳	
6歳	

保育所保育指針1965 厚生省児童家庭局

表2

年齢区分	内容
6ヶ月未満児	保育のねらいを達成するために、子どもの状況に応じて保母が行う基礎的事項及び援助する事項(36のねらいと68の内容)を年齢別に示してある。
6ヶ月から1歳3ヶ月未満児	
1歳3ヶ月から2歳未満児	
2歳児	
3歳児	「基礎的事項」…生命の保持及び情緒の安定にかかわる事項 「健康」…心身の健康に関する領域 「人間関係」…人とのかわりに関する領域 「環境」…身近な環境との関わりに関する領域 「言葉」…言葉の獲得に関する領域 「表現」…感性と表現に関する領域 領域の間で相互に関連を持ちながら総合的に展開する。
4歳児	
5歳児	
6歳児	

新しい保育所保育指針に基づいてまとめたもの

楽と造形が、新保育所保育指針では、感性と表現に関する領域「表現」として一つの領域として扱われるようになった。このことは、表現に対する新しい保育所保育指針のねらいの一つが具体化されたものに他ならない。

このような保育所保育指針の改訂や幼稚園教育要領の改訂を受け、保育の現場では、子どもの様々な表現活動を総合的にとらえ、子どもの主体的で健全な表現活動を育てて行こうとする考え方が浸透しつつある。また、いくつかの養成校では、保母を養成するという立場から、学生に対しどのような表現に関する教育を行うのが適切なのか、様々な試みがなされ始めている。勿論、本短期大学部児童福祉専攻においても、本短期大学の前身である県立短期大学において新しい保育所保育指針の理念を踏まえ、平成3年に「総合表現」という科目を新設して以来、表現の教育に関して新しい試みを続けてきた。現在は、「表現系の領域を総合的に学習し、子どもの表現活動の総合性を身をもって体験するとともに、表現活動における最も重要な〈表現することへの欲求〉（何かを表現したいという気持ち）を学生が持つ」ことをねらいとして、保育内容「総合表現Ⅰ」・「総合表現Ⅱ」という2つの科目を実施している。

本研究は、本学（含、県立短期大学）で、ここ数年来実施している保育内容「総合表現」の、カリキュラム内容と演習の成果を報告し、反省と検討を加えるとともに、本学以外の養成校で実施されている「総合表現」の内容も検討したうえで、今後の「総合表現」に関するカリキュラム内容をより充実させて行こうとするものである。

また、この研究の結果を本学で実施している「総合表現」のカリキュラムに生かすことで、「表現することの素晴らしさを理解し、子どもの表現活動を総合的にとらえ、子どもの主体的で健全な表現活動を育てる」という、現在の社会的ニーズに合った保育者を養成することが可能になると考えられる。

2. 研究の方法

平成4年・5年に、県立短期大学2年次生で実施した「表現Ⅴ・総合表現」（選択科目・受講生平成4年49名／平成5年39名）の演習内容と結果を、スライド及びVTRで記録するとともに、学生が記入したグループ活動ノート、および個人ノート、演習終了後に実施した学生へのアンケート結果などをまとめ、実施した授業がどのように受け取られ、どのような教育的効果が現れているか検討する。また、「総合表現」を実施している養成校からの資料を集め、検討を加える。

3. 研究の経過と結果

(1) 学生の活動の記録

① 授業計画（表3）

② 活動概要

⑦ 経過（表4・5：グループ別記録ノートから抜粋）

演習を始めるにあたり、まず次のようにオリエンテーションを行った。

- ・演習の進め方は、基本的に学生の自主的な活動とし、随時、教員が学生の活動場所をまわっていく。
- ・総合表現のとらえ方としては、一人ひとりが別の活動をしたものを集めて総合するのではなく、学生一人ひとりが、毎回、様々な体験をし、最後にそれらの総合化をめざすこととする。
- ・統一テーマについては、平成4年度「いのち」、平成5年度「むすぶ」を教員側から提示した。
- ・学生は、個人ノートとグループノートに、毎回の体験を通して感じたこと、考えたこと、活動したこと、また教員からの助言を記入する。
- ・中間発表を1回設けて、それまでの体験の経過報告や、グループテーマの核心部分を発表する。
- ・最後の発表は、“総合表現とは何か”に対する答が出るようなものであれば形態は自由とし、プロセスを大切にしたい、いろんな体験をふまえた発表であること。

⑧ 発表

平成4年度は「いのち」、平成5年度は「むすぶ」という統一テーマで班別に小テーマを設定し、舞台発表を行い、まとめとした。

- 発表日時 平成4年10月7日（水）、平成5年10月1日（金）
- 場 所 岡山県立短期大学講堂
- 鑑賞者 岡山県立短期大学保育科1年50名、教職員その他数名
岡山県立大学短期大学部児童福祉専攻1年50名

〈平成4年度〉

1班 「今、この瞬間を」

主 題…命の尊さ—自分が生まれたことの不思議—

あらすじ…自分が生まれたとき、小学校に入学したとき、初潮を迎えたとき、初恋をしたとき…様々な思い出の中から命の尊さを再確認し、女として生きていく上での決心をする。

形 態…①詩の朗読、身体表現、芝居など、場面ごとに様々な形態で表現。

②舞台発表の別に詩集「今、この瞬間を」を作る。

表3 演習計画

週	演習内容
1週	オリエンテーション・統一テーマを提示 グループ分け・個人、グループノート作成
2週	統一テーマをもとにグループテーマを決めるグループ活動の計画を立てる・活動開始
3週	グループ別活動
4週	同上
5週	同上
6週	同上
7週	同上
8週	グループ活動・中間発表の計画を立てる
9週	中間発表・これまでの活動内容の紹介と実演・最終発表に向けての今後の方向
10週	これまでの活動を基に、発表内容・方法・準備について話し合う 最終発表に向けてのグループ別活動
11週	最終発表にむけてのグループ別活動
12週	同上
13週	最終発表に向けてのグループ別活動 発表リハーサル
14週	発表・鑑賞会（講堂） 鑑賞者・保育料1年生50名、短大教職員
15週	VTR鑑賞・反省会

表4 学生の活動経過 平成4年度・統一テーマ「いのち」

週	1 班	2 班	3 班	4 班	5 班
1		○オリエンテーション・共通テーマとして「いのち」を提示。			
2		○グループ分けとグループテーマの決定・演習開始			
3	◇命の尊さ	◇創り出すいのち	◇生きてるっていいな	◇カモフラージュ	◇陰と陽
3	文献購読 詩集・写真集・科学誌等	児童公園散策 様々な物に命を見つける	シャボン玉づくり 工夫して遊ぶ	虫鑑賞 様々な生命を連想する	陰と陽を探して、外にスケッチにでる
4	ビデオ鑑賞 驚異の宇宙宙・人体 他	命の表現について調べるたんぽぽを中心に	フィンガーペインティング絵の具作りから	昆虫と植物の保育観察開始	スケッチしたものについて話し合う
5	詩の創作・発表と、それについて話し合う	春というテーマで大画面に書く	合唱する「きみをのせて」	カモフラージュについて文献を調べる	音を聴く 効果音全集自然編
6	詩の創作・発表・合唱・命等に関する曲	前田暎子の絵をつなぎ、ストーリーを考える	絵本を読み合う・命に関する絵本	体験をオベラテで発表するための話し合い	陰と陽をイメージさせる絵本を探す
7	曲鑑賞 異国の女たち、詩の創作・発表	ストーリーに合った音楽の選定	「森は生きている」を参考にミュージカルへ	ストーリーを劇の成長を中心とする	絵本を見ながら表現内容・方法を話し合う
8	詩の創作・発表 ダンスの振り付け	絵と曲を合わせお話を流し検討する	ストーリー音楽動きの検討構成	育た昆虫標本、カモフラージュの絵を書く	「ワンプの星」を読み鑑賞について考える
9	詩と合唱の発表 女の一生をテーマに詩・ダンス・歌によるストーリー発表計画	○中間発表・班のテーマとこれまでの活動の紹介、今後の方向			
9	詩と合唱の発表 女の一生をテーマに詩・ダンス・歌によるストーリー発表計画	絵とストーリー、ダンスの発表 タンポポの綿毛の旗をテーマに、ダンス中心としたステージ発表を計画	物語と合唱の発表 「森は生きている」を基にしたミュージカルの発表を計画	スライド絵巻で昆虫標本の成長をカモフラージュに表現	劇団員に現れた観客の顔を見てスケッチなどを示しながら発表 鑑賞について考えるよう発表計画
10	詩集をつくる、発表の構成と台本を考える	台本ダンスの振り付けを考える	リハーサル	台本読みリハーサル	配役と照明、衣裳の工夫
11	台本完成リハーサル	ブラックライト等、リハーサル	リハーサル	リハーサル	ステージへのスライド投影等、リハーサル
12	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル
13	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル
14		○発表（講堂ステージ）			
15		○演習記録VTR鑑賞・反省会			

*演習内容「リハーサル」の中には、舞台装置等の製作活動も含む。

表5 学生の活動経過 平成5年度・統一テーマ「結ぶ」

週	1 班	2 班	3 班	4 班	
1		○オリエンテーション・共通テーマとして「結ぶ」を提示。			
2		○グループ分けとグループテーマの決定・演習開始			
3	◇日本列島を結ぶ	◇結婚	◇人間関係	◇絆	
3	童歌・お伽話の文脈講読、童謡童歌の鑑賞	ダンスのビデオ鑑賞、様々なリボンの制作	団体競技テーマについて話し合う	動物園で絆についての観察、写真・スケッチ	
4	童歌・お伽話の文脈講読、童謡童歌の鑑賞	結婚についての調査内容と対象を話し合う	エイズを通じて人間関係について話し合う	絆をテーマとした絵本童謡を互いに発表鑑賞	
5	調べた歌を歌う調べた遊びをやる	学内でアンケート、市役所・結婚式場で調査	エイズについての文献資料研究	前回と同じさらに、詩や物語も調べる	
6	調べたことのまとめ	調査のまとめ、結婚式で流される音楽を鑑賞	文献研究、ビデオ鑑賞、関係教員の講義	絆についてイメージ発表、アイスカッション	
7	発表の方法と、発表の時に使うものを決める	「結婚」のイメージを自由に表現してみる	事例、レッドリボンについて各自の発表	公園で家族（母子）の絆についてを観察	
8	発表時に使う小道具大道具をつくる	各自表現したものを発表、中間発表への準備	エイズについて意見発表、発表について話す	中間発表の方法を話し合う	
9	歌の練習	制作物、調査結果のまとめ	エイズとテーマとの関連について話し合う	詩の制作発表、発表時のBGM選定	
10		○中間発表・班のテーマとこれまでの活動の紹介、今後の方向			
10	わらべ歌、遊びの発表 日本全国の童歌お伽話などを紹介する発表を計画	制作物、調査結果、ダンスの発表 結婚についての自分たちのイメージを表現するものを計画	エイズ、レッドリボンについての研究発表 エイズを通じて人間関係を考える内容のものを計画	詩と歌による発表 色々な人間どうしの絆を音楽劇にすることを計画	
11	舞台装置をつくる、発表の展開を考える	発表の展開・曲目を考える、ダンスの練習	発表のシナリオ、曲の選択、詩を各自が作る	脚本、衣裳づくり、歌の練習 ビデオ鑑賞	
12	リハーサル	リハーサル	スライドの使用等、リハーサル	リハーサル	
13	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル	
14		○発表（講堂ステージ上）			
15		○演習記録VTR鑑賞・反省会			

2班 「たんぽぽの旅立ち」

主 題…生命の力強さと自然の摂理の神秘

あらすじ…春になり、雲の上から花の精が舞い下りて、地上に魔法をかける。すると、たんぽぽの芽が出て、やがて花が咲き、綿毛となって旅立つ。嵐がやってくるが、綿毛たちは団結し、元気に旅を続ける。

形 態…身体表現とナレーター

効果音・照明・音楽を活用

3班 「ミュージカル・森は生きている」

主 題…生きていることの楽しさ、すばらしさ

あらすじ…母の病気を治すために、姉妹が真冬の森に、待雪草を探しに行く。森の中で道に迷うが、森の精たちに出会い、助けられる。そして、魔法によって真冬の森に「春」をむかえてもらい、待雪草を摘んで家に帰る。

形 態…ミュージカル — 合唱をメインとする。

4班 「いもむし花子のものがたり」

主 題…身近な生き物の不思議なカモフラージュ

あらすじ…醜い、いじめられっ子のいもむし花子が、いろいろな生き物の生き方を学ぶことによって成長するために、旅に出る。森の中で、ハナカマキリ、コノハチヨウ、ミツバチランなど、様々な生き物が擬態によって身を守っていることを知り、小さな生き物も必死に生きていることを実感する。命を助けたミツバチ達と花子は友だちとなり、楽しく旅を続けるが、ある日、花子はさなぎになり、最後に美しいアゲハ蝶に変身する。

形 態…劇

5班 「陰と陽」

主 題…生命の二つの側面—陰と陽—

あらすじ…平和な星に侵略者が現れ、戦争が始まったために、豊かな自然が破壊されてしまう。すべて死滅してしまったかに見えたが、静かに時が流れて行くうちに、かすかではあるが、新たに生命の芽生えが感じられてきた。

形 態…語りと身体表現

バックにスライドを投影した。

〈平成5年度〉

1班 「日本列島を結ぶ」

主 題…遊びやわらべうたの中に生かされた伝統

あらすじ…北海道・青森・新潟・東京・京都・岡山・愛媛・宮崎・沖縄の民話やこ
とば遊び、子守歌を、レポーター方式で紹介する。

形 態…劇・合唱

2班 「結婚」

主 題…結婚を直前に控えた乙女の愛と情熱と不安に満ちた心理

あらすじ…結婚を直前に控えた乙女の気持ちの揺れを、次の3部に分けて表現した。
「第1部 あなただけを見つめてきた…愛に満ちた日々が始まる」「第
2部 結婚への不安感」2部 結婚への不安感」「第3部 あの鐘を鳴
らすのはあなた」。

形 態…劇・身体表現

3班 「人間関係－エイズと共に生きる－」

主 題…エイズ問題を通して、社会におけるあらゆる差別や偏見について考える。

あらすじ…エイズに感染した少女の心の動揺を劇と身体表現で表すとともに、実際
にエイズと闘っている人々の心の叫びを、スライドと朗読で紹介する。

形 態…劇・身体表現・朗読（スライド）

4班 「絆（きずな）」

主 題…日常生活の中にある絆

あらすじ…人間はその成長過程で様々な絆で結ばれる。発表では、「親子の絆」
「兄弟の絆」「友達との絆」「恋人同志の絆」を、歌とせりふ、身体表現で
表現した。けんかをしたり、仲直りをしたり、落ち込んだり、勇気づけ
られたり…このような経験を繰り返しつつ、絆を深めていく人間を表現
した。

形 態…ミュージカル

(2) 研究の経過と考察

①表現の総合化への状況

学生の活動内容と経過（表4・5）を、第3週から第13週までの演習時間に沿って、音楽・
動き・言葉・造形・その他の活動に分類し、さらにそれらを、表現のための受動的活動（実質

的な表現活動に至るまでの知識や表現意欲を得るための活動)と能動的活動(実質的な表現活動)に分けて、活動内容の変化の状況(図1-①)と、活動内容別頻度(図1-②)を図に表わした。図1-①②によって平成4年・5年全体を見ると、中間発表(H.4は第9週、H.5は第10週)までは、各班とも様々なアプローチを試み、多様な活動内容を体験しているが、中間発表以降は、最後の発表に向けて、全ての班で音楽・動き・言葉・造形の4領域が現われ、総合化が行なわれている。しかも、演習時間が進むほど、能動的活動が主流になっている。

同様の図(図2-①②~図7-①②)によって、各班の総合化に至る活動内容と経過を詳細に追っていくと、3つのタイプに分類することができる。

第一は、H.4, 1班(図2-①②)のタイプで、この班は、音楽・動き・言葉・造形の表現系4領域の活動内容のうち、言葉の活動頻度が非常に高い。そして、活動の当初から詩を核心として進め、詩集や写真集の講読から詩の創作・発表を続けながら、音楽や動き(ダンス)へとふくらませている。H.5, 4班(図3-①②)もよく似た傾向を持ち、初めに動物園で絆の観察から、各自の調査発表やディスカッションを重ねて、言葉を中心とした活動からミュージカルへと展開させている。

第二は、H.4, 3班(図4-①②)タイプで、この班は、第6週までの活動内容を、シャボン玉づくり、フィンガーペインティング、合唱、絵本と意図的に毎回変えて、多様な表現活動を体験している。そして、音楽・動き・言葉・造形の4つの軸の能動的活動が、均等にそれぞれ高い頻度となっている。H.5, 1班(図5-①②)も同様の傾向を示しているが、各領域のバランスはとれているようであっても、H.4, 3班(図4-①②)に比べてそれぞれの頻度が低いのは、各週の活動がやや盛り上がりには欠け、単調なことが多かったため、総合化が遅れたためと考えられる。

第三は、表現系4領域以外の活動内容(環境・人間関係など)の多いタイプである。H.4, 4班(図6-①②)は、図表にカウントされていないが、第4週に始めた昆虫の飼育、植物を育てることを第9週の中間発表後まで続けながら、毎回の活動を行っている。このことは、その後の総合化において大きな影響を与え、実感の込められた表現をすることにつながっている。また、H.5, 3班(図7-①②)は、第4週から第9週までを調査研究と話し合いに費し、多様な表現活動をしたとは言えないが、この時のため込みが発表でのエネルギー源となっている。

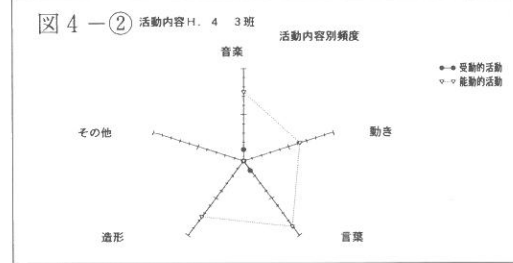
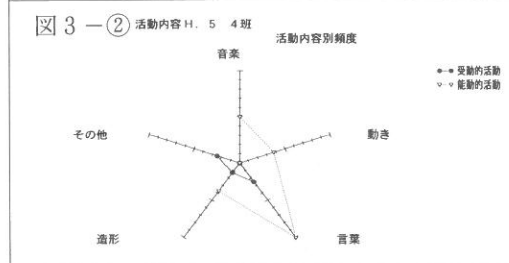
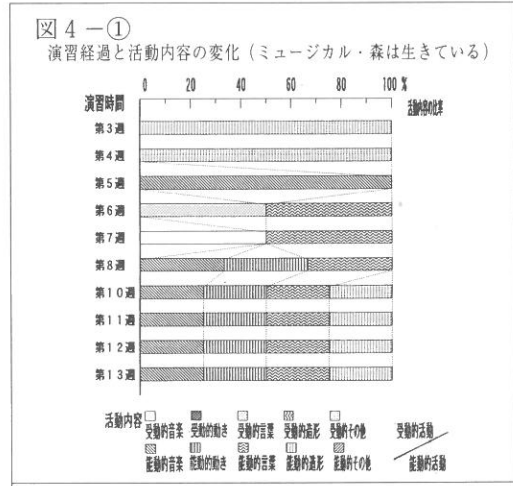
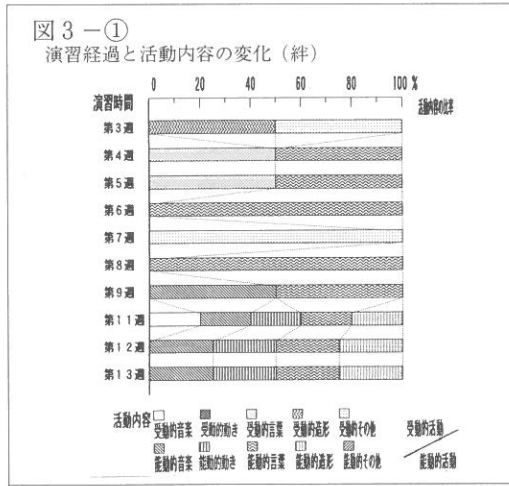
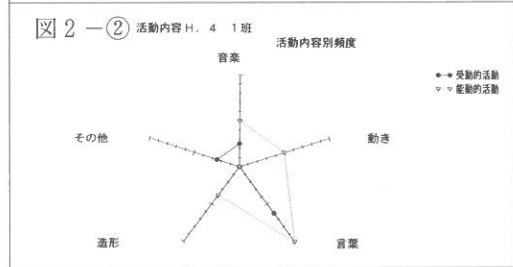
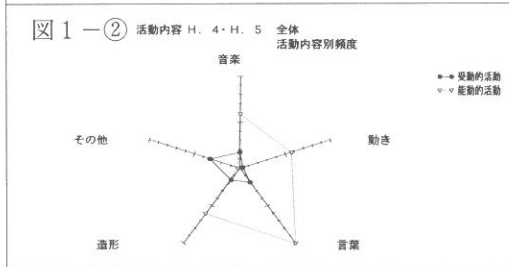
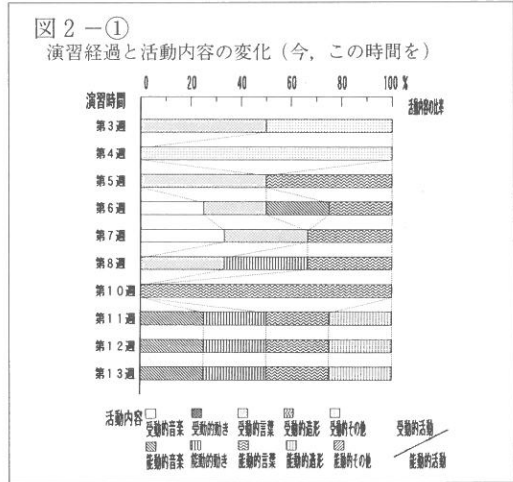
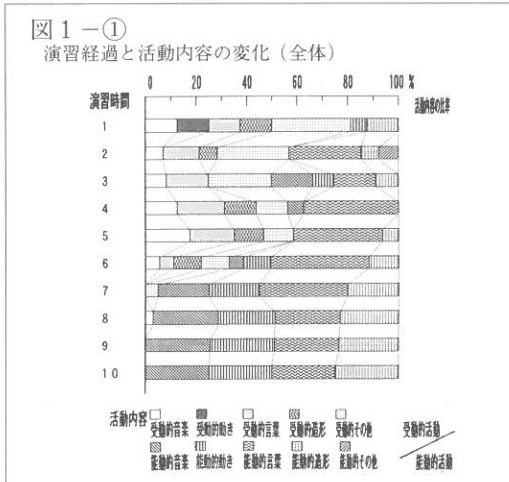


図5-① 演習経過と活動内容の変化 (日本列島を結ぶ)

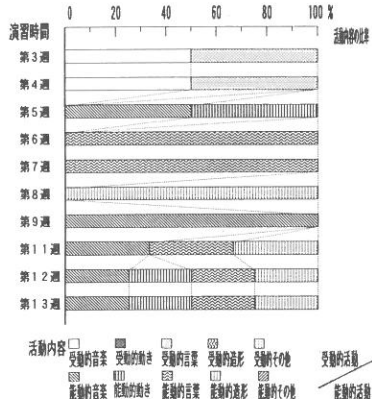


図6-① 演習経過と活動内容の変化 (いもむし花子のものがたり)

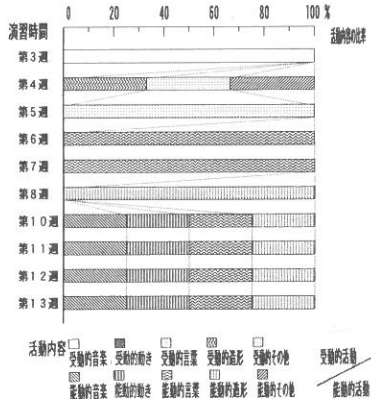


図5-② 活動内容 H. 5 1班

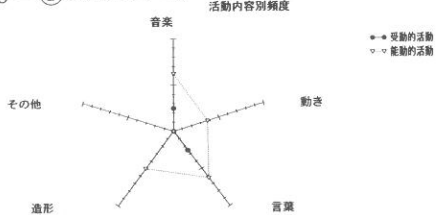


図6-② 活動内容 H. 4 4班

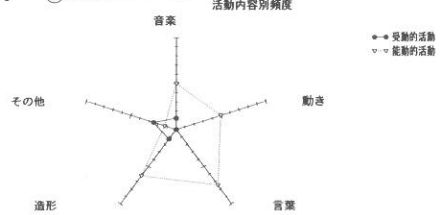


図7-① 演習経過と活動内容の変化 (人間関係-エイズと共に生きる-)

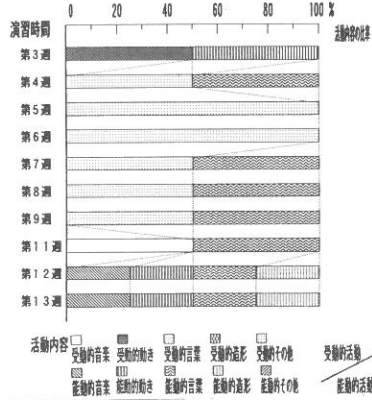


図7-② 活動内容 H. 5 3班

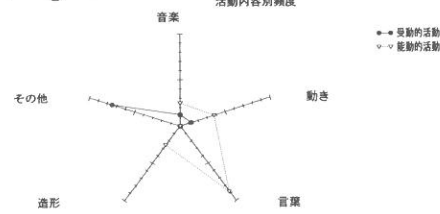


図9

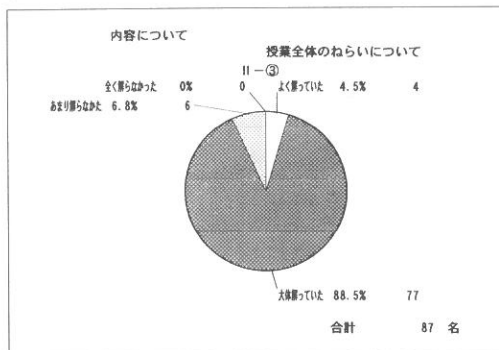


図10

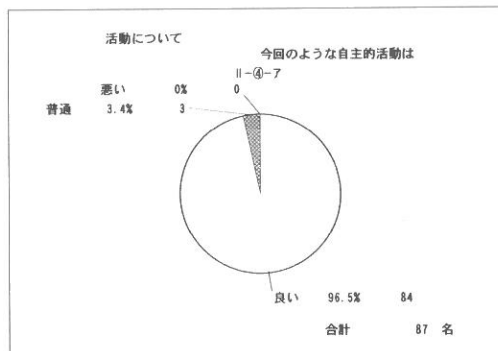


図11

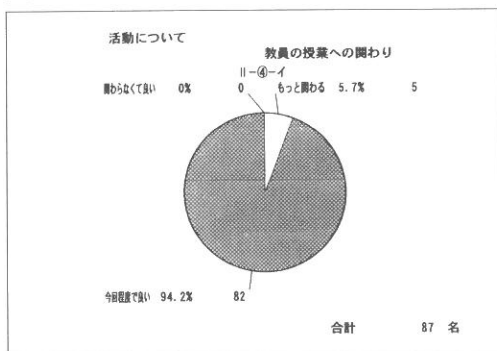
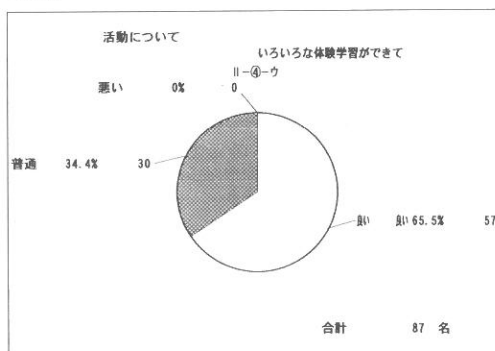


図12



た、研究や資料集めの活動が発表に結びつかなかつた、時間不足、練習不足、人に頼ってしまった、等の意見があつた。

- ・項目Ⅱ-② 内容について 総合表現の授業を通してどのような力がついたか
表現力がついた、協力し合つて一つのものを作り上げていく力がついた、という意見が大半である。その他では、一つのことから色々なことをイメージする力、物事を多角的にとらえる力、一つの表現したいことを色々な方法で表現する力、自分たちで考え行動する力がついたという回答も見られた。

項目Ⅱ-①②の2つの結果から判断するかぎり、担当者が意図したことは、ほぼ達成され、学生たちにとっても有意義な演習となつたことがわかる。

- ・項目Ⅱ-③ 内容について 授業全体のねらいについての理解(図9)
この演習のねらいについては、大方の理解が得られていたようである。ただし、あまり理解できないまま活動に入つていった学生も若干いたことがわかる。これは演習冒頭のガイダンスに原因があると思われ、総合表現というものの自体に対する教員の考えをより明確にするとともに、ガイダンスの内容を見直す必要があるのではないかとと思われる。
- ・項目Ⅱ-④ 内容について 活動について
ア 自主活動が良いか(図10) イ 教員のかかわり方について(図11)

図13

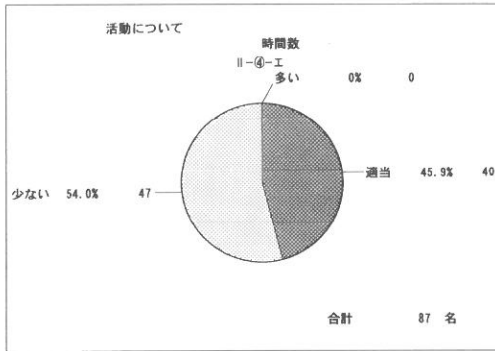


図14

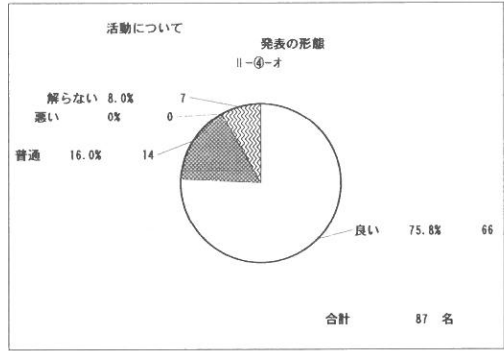


図15

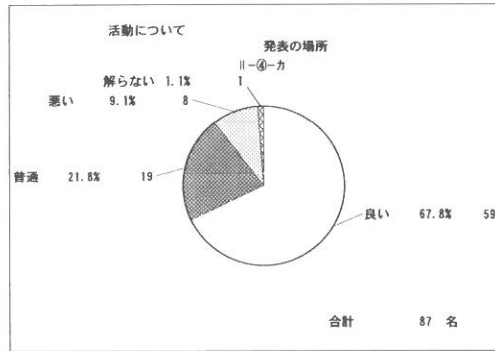
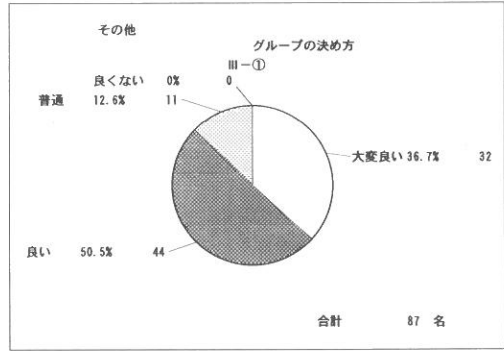


図16



自主的な活動が良いという回答が、84名。普通という回答を含めると87名全員が、自主的な活動を評価している。また、教員のかかわりをさらに求めるものが、5名。現状で良いとするものが83名で、およそ、教員のかかわりの度合いは現状のまま、学生の自主性を生かす方向で良いと判断できる。

ウ 体験学習について (図12)

体験学習ができて良いが、57名。悪いとしたものはなかった。様々な実体験の機会が少ない学生にとって、この演習は有効であったと思われる。

エ 時間数について (図13)

授業時間数は、適当40名。少ない47名。授業の実態、担当者の感想とあわせ、この数字から判断するかぎり、授業数の少なさが問題点として挙げられる。

オ 発表の形態について (図14) カ 発表の場所について (図15)

発表の形態は、舞台での発表が中心となった現状の発表形式を、66名が良いとしている。加えて、研究の過程が解るような発表をしたいという意見も見られた。発表の場所については、現状で良いとしたもの59名、悪いとしたもの8名、普通と答えたもの20名で、学内の講堂での発表ということにそう不満はないようである。悪いとしたものなかから要望として、舞台設備や舞台の広さについての意見がみられたが、発表の場所は、発表の方法や観客の問題も含め

て再検討の必要があると思われる。

・項目Ⅲ-①② グループの決め方について（図16）

自由に決めるグループの決め方は、大変良い、良い、としたものが76名。これは、②のグループの決め方についての意見でみられるような、気の合うもの同志のほうが活動しやすい、考えの似ているもの同志のほうが活動がスムーズに進む、という考え方の反映したものと見ることができる。しかし、話す機会のない人の話を聞きたい、好きなもの同志では活動がマンネリになってしまう、という意見もみられ、充実した活動をするためにどのようなグループの決め方が良いのか、改めて考えなければならないと思われる。

4. 他校での取り組み

表7で示したものは、総合表現にかかわる具体的な取り組みを行っている主な養成校の研究内容をまとめたものである。この表からわかるとおり、保育内容総合化への取り組みは以下のような3つのタイプに分けられる。

- ① 本学で行っているように、「子どもの様々な活動は、いくつかの表現活動が総合されたものである」という観点に立って、保育内容の中の表現領域を総合化してとらえ、演習を実施し、保育内容総合化の理解を表現の分野から図ろうとするもの。
- ② 表現領域の総合化を基本に、その他の保育内容の要素も加え、人間関係や環境、指導法も含めたより広い分野での総合化を図ろうとするもの。
- ③ 「児童文化」という観点から保育内容総合化の問題をとらえ、調査研究や創作活動によって学生に保育内容を総合的に理解させようとするもの。

本研究「表現領域の総合化への試み」は、保育内容総合化という問題の中の部分的な研究としてとらえることもできようが、実施した授業の中での学生の活動内容をふりかえてみると、各表現領域の内容以外に、人間関係や環境、あるいは指導法といった他領域の内容も十分に関係し、色々な局面でその重要さを学生自身が身をもって理解できたようである。この意味で、我々の試みは、表現領域のみの総合化ということに止まらず、保育内容全体の総合化に向けての一つの試みだったととらえることもできる。

表現領域の総合化から保育内容全体の総合化を図ることの意義は、表現することの喜びや表現による育ちを、身をもって体験することであり、その表現が達成されたとき、学生自身の体験が子どもの表現活動への理解を深めることや、よりよい指導方法を獲得することに、フィードバックされるという点にある。表現の出発点としての発見や驚き、感動の重要性、表現達成のために自ら工夫し試行錯誤を繰り返す主体的な取り組みの態度、一人ひとりの個性を認め、お互いがコミュニケーションできる健全な人間関係を前提としたうえで、お互いの作品を見る目など、学生自身が実体験として学ばねばならない多くの事柄が、総合表現の活動のなかに存在する。学生が

表 7

他養成校での取り組み

養 成 校 名	内 容	科目担当教員	総合表現の考え方
広島文京女子大学短大部	・研究「保育者養成教育総合化の試み」保育者養成教育課程構造・編成論として、表現系の内容にとどまらず、課程全体の科目の相互関係を見直し、教育の内容の充実と効率化を図ろうとするもの。		表現の総合にとどまらず、カリキュラム全体の見直しを図るもの。
山口芸南短期大学	・研究「保育者養成教育総合化の試み」・科目「保育内容の研究(表現)」保育内容の研究(表現)複数担当制実施の試みとして、音楽リズムの内容を保育の指導内容の改定に準じてとらえ直す。子供の表現全体(音楽、造形、身体、言語など)について、音楽的視点から研究する。	基礎技能系・保育内容系	基礎技能系、保育内容系の教員が、共に表現の科目を担当することで、総合表現の科目設置の意図や内容の理解を深めることになる。
聖カタリナ女子短期大学	・研究「保育者養成における保育内容・表現の実践的報告」・科目「子供と表現」教育要領の改定にともない「子供と表現」という新たな科目を実施。内容は、「共通のテーマに即して、うたって、作って、あそぶ体験をしながら幼児への指導法を身につけてゆく」というもの。	音楽・身体・造形・三分野の教員	幼児にとっての表現活動は、生活、遊び等すべてを総括するものであり連続している活動である。豊かなイメージづくりは、豊かな経験の蓄積を土台にしている。
松山東雲短期大学	・研究「複数担当による表現の試み」・科目「保育内容の研究(感性と表現)」表現というものを子供の立場からとらえ直し、「子供にとっての楽しみ」や「表現を促す人間関係」という視点から、乳幼児期の心身の発達を取り上げ、造形、音楽、身体表現、音楽などの演習を行なう。	音楽・体育・絵画・保育	様々な表現活動や遊びが子供にとってなぜ楽しいのか、子供の側から考えることが、保育内容を総合的に見ることになる。
名古屋自由学院短期大学	・研究「保育内容研究総合化の試み」・科目「保育内容研究発表会」(人間関係・音楽・表現それぞれの科目担当者が連携をとり指導し、総合的な発表につなげる)一つの共通した世界に遊ぶことによって、互いのイメージを高め合い、表現方法を工夫しあう。併せて、人間関係の在り方、行事の企画運営の方法を体験的に学ぶ。	人間関係・音楽・音楽・造形・身体	「保育内容」は、一つの世界から要素ごとに枝分かれた状態をそれぞれの教員で教授するのではなく、総合的な活動としてとらえ実践する能力の養成を促すものである。
山梨学院短期大学	・研究「保育内容総合化への試みー表現領域をめぐる」・科目「保育内容II」保育内容Iの各領域ごとの学習を基に、保育内容の総合性への理解を深める。保育における総合の意味、総合活動の抽出、教材についての学習をすすめる。今年度は表現活動を取り上げ、指導法の習得と学生自身の表現力の育成をねらいとする。	基礎技能・保育内容・保育原理	保育内容に関わる6領域をそれぞれ単独の科目としているのは、学生が各領域の関連と保育内容全体についての理解を深めることはできない。
東京家政大学 東京家政大学短期大学部	・科目「児童文化」「児童文化演習」児童文化とは何か、概念成立の根拠を、子供の生活史や遊び、文学から考察する。また様々な児童文化財の意義を理解し、それぞれの特徴、歴史と現状を検討する。(観劇)学生主体的な活動。前期は絵本を中心にその意義と良い絵本の選択眼を養うとともに、紙芝居、人形劇などの実演演習を行なう。後期は、各自の研究課題によって、調査研究、創作活動を行なう。(観劇)。		児童文化の観点から子供の生活や遊びについて理解を深め、調査研究や創作活動を通して総合的な表現を学生に実現させようとするもの。

表中、東京家政大学同短期大学部の項目は、同大学平成5年度大学案内よりまとめたもの。その他は、平成4年全国保母養成協議会研究大会発表論文集より抜粋したものである。
*「児童文化演習」は東京家政大学児童学科で実施されている科目(短期大学部では実施されていない)である。

表現活動をする上でつきあたる問題は、子どもたちがつきあたる問題と共通のものであり、これを解決することは、子どもたちと一緒に活動し指導できるような感性を育て、保育者としての資質を高める上で、非常に重要なことである。

5. まとめ

総合表現の授業は15週・1単位の演習として、「音楽」「動き」「言葉」「造形」担当者の4名が、それぞれの立場で、随時学生にかかわりながら進めてきたものである。これらの授業内容について学生のアンケート結果、教師の記録ノート、ならびにVTRの分析などにより考察したものをまとめると次のようである。

1. 授業の目標については、次のように設定したものである。(1) 様々な体験を通して感性を高める。(2) 様々な表現を試み、表現することを楽しむ。(3) グループごとにテーマを設定し、テーマに最も敵した表現方法を検討し、発表を通して、他者にも感動を味わってもらえる様な表現の工夫をする。これらの授業目的に対して、95%の学生が理解、または大体理解していたようであり、意欲的に取り組んだと考えられる。
2. 統一テーマの決定については『いのち』『むすぶ』ともに担当者が提示したものであるが、学生のイメージはそれぞれ多様な広がりを示し、かつ、十分な話し合いにより、内容を深めることができたようである。今回は学生たちの感性を大切にしながら、今持っている能力のすべてが精一杯出せるように配慮した。それは、学生たちが現在の自分自身を表現すること

によって、感性を高め、その感性を通して子どもの表現にも共感し、受容し、子どもとともに表現を楽しむことができるようにとの教員の願いがあったからである。特に、「いのち」のテーマは人が生きる原点であり、いずれの年齢を問わず様々な共感をもちうるものであり、真剣に取り組むことができた。また、「むすぶ」については、人間関係、自然環境、動物の世界、あるいは、歴史の流れのなかでとらえるなど、森羅万象すべてのかかわりあいとして理解することができ、保育内容の総合化にふさわしいテーマであったといえよう。

3. 学生の活動内容を活動経過から分析すると、表4・5のとおりである。

演習経過と活動内容の変化を見ると、初めの階段では、個々人、あるいは、グループで文献講読、児童公園を散策、音楽鑑賞、シャボン玉をつくって遊ぶ、VTR鑑賞、動物園に行き親子の絆をみるなど、統一テーマに接近するために様々な体験をしている。この体験はそれぞれグループの表現内容を暖め、表現のためのため込みとなる受動的活動であり、それが80%を占めている。この段階はまさに、感性が磨かれている段階といえよう。

少し進んだ段階では、受動的活動が次第に減少し、表現欲求が高まったり、広がったりしながら様々な能動的活動へと移行する。中間期では能動的活動が受動的活動と平行、あるいは、同時に出現しており、その割合は50%~60%との間で揺れている。

後半になると、95%~100%が様々な表現活動にむかっており、活動のほとんどが能動的活動といえる。たとえば、この段階で行われる音楽鑑賞は初めの段階で行われる単なる鑑賞とは異なり、表現活動に必要な目的的鑑賞であり、それは、能動的活動と考えられる。また総合的に鑑賞・表現が繰り返されて新しい感動体験を積むことができ、感性-表現-感動-新感性の誕生となり、この段階はまさに表現が豊かになる段階といえる。(図1-①②)

各表現領域から活動内容の経過をみると、初めの段階は言葉の領域が中心であるが、次第に造形領域が加わり、同時に歌ったり、ピアノを弾いたり、音楽鑑賞をしたりなど音楽領域も加わっていった。さらに、動きも工夫され、表現したいことの全体構想が大まかにできたころから、音楽、動き、言葉、造形などが様々にかみあいがら表現・練習・修正・洗練などが繰り返されて、次第に、内容の濃いものになっていった。ここで、それぞれの表現領域は総合化されたといっても、各表現の出現時期に差のあったことを指摘しておきたい。

言葉の表現は、様々な表現の核をなしながら終始活動の中心となっている。そして、造形は即時的に活動が始まり、しかもその活動は継続的である。一方、音楽・動きは表現内容、表現構想がある程度できたところで活動が始まるのが特徴といえる。(図1-①②)

4. 活動の状況は、グループによって最初からテーマをしぼり込んで深めていったところと、前半は幅広く様々な表現を楽しんでいくうちに、次第に、まとまっていったものとの分けられる。前者はテーマから内容の広がりが見られ、後者の場合は様々な体験からテーマがしぼられ楽しみながら総合化が行われたようである。共に、充実感が認められ保育者として貴重な体験をしたといえよう。(図2-①②、図4-①②)

5. 発表において、学生たちは精一杯表現できた喜びや、他のグループの鑑賞を通して新たな感動を味わうことができ、新しい感性が育ったと考えられる。また、プログラムの幕間で簡単な手遊びや歌遊びなども挿入して全体の流れをリズムカルにするなど、運営についても工夫した。発表会の運営については役割分担をしたが、表現のみならず、他の行事などにも役立つことであり、指導者としての資質を高めることになると思う。
6. 授業を終えての反省を、学生のアンケート結果よりまとめると、グループ分け、テーマ、内容、取り組みかた、発表形態など学生の自主活動にしたことが良い結果を生んだと考えられる。主体的な取り組みが意欲を育てると確認された。一方、発表の場所が狭い（発表場所）、発表の内容に活動経過を含めてはどうか（発表方法）、子どもにも見てもらいたい（観客）、活動時間が少ない（授業時間数）などの問題が挙げられ、今後の課題になろう。
7. 現県立大学短期大学部における表現に関するカリキュラムは表現Ⅰ・Ⅱ、総合表現Ⅰ・Ⅱを演習各1単位で行っているが、総合表現担当者の重複、内容の分離化、時間数の不足など問題があり、本研究の結果を参考に今後は正して行きたい。

6. おわりに

一般的に、現代の子どもたちは、他から与えられ、教え込まれることが多く、それを受け止めるのに精一杯で、自発的な探究や、表現を工夫したりする積極的な活動へのかかわりが弱くなっていると言われている。加えて、遊び場や住居環境、家庭環境の変化により子どもたちだけの世界での活動が著しく減ってきている。このような問題点は、子どもの側だけの問題ではなく、すでに保育者を目指す学生自身もそうした環境の中で育ってきているという事実を再確認し、それぞれが自分の問題として解決していくという態度が必要である。

我々の今後の取り組みは、このような問題を解決するために、表現領域からの視点で、保育内容総合化の真の意義をとらえ研究をすすめていかねばならないと考えている。

本研究のまとめにあたり、岡山県立大学短期大学部第2回特別研究費の助成を賜わった。記して感謝申し上げる。

参考文献

- 岡本夏木 他 : 幼児の生活と教育4・理解と表現の発達, 岩波書店, 1994
厚生省児童家庭局 : 保育所保育指針, フレーベル館, 1990
文部省 : 幼稚園教育要領, 大蔵省印刷局, 1989
黒川健一 他 : 保育内容表現, 建帛社, 1989

(平成6年11月30日受理)